

---

20-twenty-

練馬治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

20 - twenty -

### 【Nコード】

N1794N

### 【作者名】

練馬治

### 【あらすじ】

もうすぐ二十歳を迎えようとしていた美世はある日、不思議な夢を見る。それは、まだ生まれたばかりの自分自身がベビーベッドにいるという夢だった。不思議な夢だと思っているうちに、夢の中に出てくる美世は日を追うごとに歳を重ねていく。その夢を見ていくうちに美世の心の中で、ある変化が起こっていき――。現代を舞台にした、ちょっと不思議な二十日間の物語。

## 【01】1日目〜2日目

この日の夜、美世はある不思議な夢を見た。

若い夫婦と赤ちゃんが、三人で遊んでいるという夢だった。

赤ちゃんはベビーベッドで横になりながら、母親が持ってきたウサギの人形を興味津々にいじっている。その光景に父親と母親が笑い声をあげると、赤ちゃんもそれと連動するように笑い声をあげる。美世はそんな彼らの姿を、後ろから眺めている。

なんてことはない。幸せそうな家族の光景だった。

美世自身はまだ子供を作ったことはないが、あと何年か経てば、そこにいる母親と同じような体験をするかもしれない——ありきたりで、とても微笑ましい光景だった。

夫婦の方に視線を移してみると、なぜか夫婦の全身はそこだけ影に覆われているようにぼやけて、よくうかがえなかった。おまけに周りの風景も同じような現象が起こっており、まるで赤ちゃんのいるベッドだけが、夢の中でスポットライトに当てられているような感じだった。

そして、美世は再び赤ちゃんに視線を戻す。

美世の見た印象では、赤ちゃんはまだ一歳も迎えていない乳児のようだった。

よっぽど気に入ったのか、嬉しそうな顔でウサギの人形と遊んでいる。その光景を眺めながら美世は自分でもよく分からない、ある『違和感』を抱いた。

——あのウサギの人形、どこかで見たことある？

美世が目覚めたのは、その直後だった。

ベッドから起き上がって数十秒間、美世の意識は現実と夢の狭間を歩き来した。

そしてようやく現実に戻ることができ、ぼりぼりと長い黒髪を掻きながら、美世は横に置いてある目覚まし時計を確認する。

——六時十分。いつもより十分も早く起きてしまった。

とはいえ、二度寝をするにも微妙な時間である。とりあえず美世は時計の設定を解除して、ベッドから出た。トイレと洗顔を済ませ、冷蔵庫にあったペットボトルの水を取り出して喉をうるおす。

「ふう……」

八畳一間の狭い部屋に、美世の吐息だけが小さく響く。

今日は月曜日。これから五日間、自分は社会人として仕事に勤しまなければならない。

そう思うと、月曜の朝は少なからず憂鬱な気分になってしまうものだが、今日は寝覚めが良かったおかげで、珍しくすっきりとした気分だった。

そうになると、久々にまともな朝食を作ってみたくなる。

最近朝食を作るのも面倒だったので、コンビニの弁当やらビタミンゼリーを代わりとしていたが、たまには自分で作るのも悪くない。

美世は再び冷蔵庫の中身を確認して、サンドイッチ、オムレツ、栄養バランスを考えてサラダも作ることに決めた。上京する前はからつきし料理など出来なかったものの、今では食卓の王道的なメニューくらいならば問題なく作ることができる。

そんな美世が東京に上京してきたのは、今から二年前のことだった。

関東のとある地方に生まれた美世は、高校を卒業後、昔から憧れていた東京での生活を夢みて単身で上京してきたのだ。

就職先はごく普通の通販会社で、美世はそこで事務の仕事をした。

だが、昨今の不況の影響で大幅な人員削減を行ってしまったため、

新人とはいえ会社での仕事はなかなかハードだった。慣れない仕事に加えて、初めての一人暮らしの戸惑いもあってか、働き始めの頃の美世は精神的にだいたい不安定だった。

それから二年。

相変わらず仕事は多忙なもの、ようやく東京での暮らしにも慣れてきた。

職場での人間関係は百パーセント良好とはいえないが、新しい友人も作ることができて、とりあえず今の生活は順調だと考えていい。手早く作った朝食をテーブルに並べて、美世はテレビのボタンを押す。

朝のニュース番組を見ながら、久々に余裕のある朝食の時間となった。

サンドイッチをかじりながら、ふと美世は先ほどの夢を思い返す。改めて考えると、不気味なくらいあれは鮮明な夢だった。

夫婦。赤ちゃん。ウサギの人形。

普通だったら起床して時間が経つと、たいていの夢は忘れてしまうものだが、今日の夢は未だに記憶にしっかりと残っている。

おまけに、その内容は美世の中で妙な『違和感』を湧かせているのだ。

「あのウサギ……どこかで見たことあるっけ？」

フォークを持つ手を止めて、美世は小さく首を傾げる。

さっきの夢の中で、赤ちゃんが持っていた一体のウサギの人形。

見た目は何の変哲のないウサギの人形だが、それが美世の中では妙な既視感となって離れないのだ。

場所は定かではないが、確かに美世はあのウサギの人形を見たことがある。

しかし、いくら記憶を引き出しても、明確な答えはみつからなかった。

美世はテレビの方に目を向けてみると、そこでは今日——一月二十三日の天気予報が伝えられていた。 天気は晴れ。雨の心配もな

い、絶好の冬晴れ日和。

それとは裏腹に今の美世はどこか釈然としない、どんよりとした雲に覆われたような気分を抱かずにいられなかった。目覚めた時の気分が良かっただけに、これでは台無しだ。

「……やめましょ」

これ以上、余計なことを考えても時間の無駄である。

そう判断した美世はさっさと朝食を済ませ、仕事に行く準備を始めた。

その日の夜、美世はまた不思議な夢を見た。

昨晚も出てきた夫婦と赤ちゃんが、今度も一緒になって遊んでいるという夢だった。

昨晚とは違って赤ちゃんはベビーベッドにおらず、カーペットの上で夫婦たちと少し離れた位置に座っていた。肝心の夫婦はウサギの人形を持ちながら、赤ちゃんがこっちに来るように催促していた。夫婦が持っている人形は案の定、美世を悩ませたあのウサギの人形だった。昨日に比べてあちこちの布が剥がれ、だいぶ痛んでいるように見える。

「さあ、みーちゃん。ウサギさんが『早くみーちゃん来てよー』って言ってるわよ」

母親の声に、『みーちゃん』と呼ばれた赤ちゃんが反応する。

よく見てみると、その赤ちゃんは昨日よりも少し大きくなったような気がした。髪の毛もだいぶ伸びており、美世は初めてその赤ちゃんが女の子だと気付く。

そして、赤ちゃんはカーペットの上で一人立ちをした。まだまだバランス感覚が発達していないのか、両手が妙に上がったままでありながら、赤ちゃんはヨチヨチと一生懸命に前に進んでいく。

やがて自分の足だけで夫婦のもとに辿りつくと、母親は喜びを爆発させながら赤ちゃんを強く抱きしめた。

「すごいじゃない、みーちゃん！ 初めて『あんよ』ができたじゃない！」

「みーちゃん、本当にすごい！ よく頑張った！」

父親と母親の嬉しそうな顔に、赤ちゃんも笑顔を浮かべる。

その姿に微笑ましく思いながらも、美世は周囲を見渡す。

ここで初めて、彼らたちが住んでいる部屋を確認することができた。昨日は不可解な闇に覆われてよく分からなかったが、今はしっかりと見られる。

どうやら、この場所はマンションの一室のようだった。

印象としては、何十年くらい前の古い時代の『匂い』が感じられた。

その部屋を見渡していると、再び奇妙な違和感が美世を襲った。

昨日の人形以上に、もっと強烈な違和感である。だが、どうしてもその正体を掴むことができない。

そして、今度は夫婦の方に視線を向ける。

部屋と同様、夫婦の姿も今日はしっかりと映っていた。

もしかしたら、この違和感を正体が分かるかもしれないと、半ば期待を込めて向けたものだが、彼らを確認した瞬間——予想を遙かに越える事態に、美世の心臓が大きく跳ねた。

夫婦は、若い頃の美世の父親と母親にそっくりだったのだ。

美世が目覚めたのは、その直後だった。

その日の昼休み。こらえきれず美世は携帯で、実家の母親の優子に連絡をした。

「美世が歩き始めた時期？」

「うん、そう……」

「いきなり電話がかかってきたと思ったら、そんなこと？ 私、てつきり美世が仕事で何か嫌なことでも起こって、ビクビクしながら掛けてきたと思ったじゃない」

「ご、ごめん。仕事の方は大丈夫だから。……で、私が歩き始めたのはいつ？」

「そうねえー。一歳の初めの頃だったかしら。でも、歩き始める前より大変だったのが、その後でね。私が目を離した隙にいろんな所に勝手に行っちゃうから、本っ当に困ったものだったよ。それに――」

「も、もうそれでいいわ。それで、もう一つ質問があるんだけど」  
優子のペースに付き合っていたら、すぐに昼休みが終わってしま  
う。

「その頃に、ウサギの人形とか持ってた？」

「ウサギの人形？」

「えーと。実は私もよく覚えていないんだけど……」

電話越しの優子はしばらく黙って、やがて思い出したように答えた。

「あー。そういえば、持っていたわね。あのボロボロのウサギの人形のことでしょ？ あれは確かあまりにもボロボロだったから、美世が二歳の頃に捨てちゃったのよ。そしたら美世、人形がいなくなつて、ぐわんぐわん大泣きしちゃってね。さすがにあの時は、私も悪いことしちゃったかな、なんて思ったわよ」

「そうなんだ」

「で、どうしていきなりそんな質問のために電話なんか掛けてきたの？」

「べ、別に深い意味があったわけじゃないよ」

美世はなるべく平静な声でに返す。夢の話を優子に打ち明けるのも難だったので、適当にはぐらかしながら会話を進めていき、ようやく電話を切った。

携帯を閉じて、美世はイスにもたれ掛かって大きく息を吐いた。

今日の夢に出てきた夫婦は、間違いなく母親の優子と父親の誠二だった。当然、今より若い。優子の証言が正しければ、今から十八年前の姿だろう。

そして『みーちゃん』と呼ばれていた、女の子の赤ちゃん。

言うまでもなく、あれは今から十八年前の美世の姿であろう。

もうすぐ二十歳になろうとしている自分が、まさか赤ちゃんの頃を夢で見ってしまうとは――。

あまりのおかしさに、美世は一人で苦笑する。

偶然にしては不思議であるが、別に不快だとは思わなかった。

むしろ昨日の朝に抱いた違和感が解決して、いっそのこと清々しい気分だった。

もはや記憶から消滅したと言ってもよい赤ちゃんの頃の記憶が、夢をきっかけに思い出してしまうとは――掛けたつもりではないが――

――夢にも思わなかった。

「あーあ。また昔の夢を見られればいいのにな」

そう独り言をつぶやいてから、美世はイスから立ち上がる。一緒に昼食を食べる予定だった友人たちを先に外で待たせてしまっているのも、急いでその場所へ向かう。

そして、その日の夜。

美世は優子との電話でも触れた、ウサギの人形が捨てられてしまったショックで、二歳の自分が大泣きしている夢を見た。

## 【02】3日目〜5日目

美世の夢は、それだけで終わらなかった。

ウサギが捨てられて大泣きした夢の翌日は、体操服を着た幼い自分が幼稚園の運動会でかけっこしている夢を見た。

しかし、走っている途中で思いっきり転んでしまい、慌てて駆け寄ってくる先生の足にしがみついて、人目も気にせず大泣きしてしまった。

初めての運動会での出来事だったので、三歳くらいの時だと後に美世は思い出した。

その翌日は、幼稚園の頃に一番の親友だったマサキくんが遠くに引越すことが決まったため、最後のお別れ会をやった時の夢を見た。あれは四歳の頃だった。

その翌日は、今度は美世が誠二の仕事の都合で生まれ故郷から引越す時の夢を見た。

マサキくんの時は泣かなかった美世だが、この時は涙を流して幼稚園の友人との別れを惜しんだ。その最後の日、美世は車の後部座席の窓からぶんぶん手を振って、離れていく友人たちの姿を見た――。

美世はベッドから起き上がり、ぼんやりとした意識で先ほどの夢を振り返る。

自分が生まれ故郷を引越したのは、小学校に入る直前。あれは五歳の頃だった。

その後、美世は高校を卒業するまで第二の故郷で暮らすことになる。

これまでの夢を通じて、美世は長らく忘れていた生まれ故郷の記憶を久しぶりに思い出すことができた。最初は当時の住んでいた家すらも忘れてしまっていたが、この夢をきっかけに、今は鮮明に思い出すことができる。

「本当に……不思議な夢、ね」

自分でも不思議に思いつながら、美世はベッドから出る。

今日は休日の土曜日なので、かなり遅めの起床だった。

すでに美世が過去の夢を見始めてから、五日目となっていた。

さすがに五日もこの現象が続くと『どうして、こんな夢をみるのか？』という発想から『夢の内容を純粋に楽しもう』という発想に切り替わっていた。

一時は病院に行こうかとも迷ったが、特に体に異常もないので、最終的には成り行きに任せることにした。

それにこの五日間で、美世は夢の『ある法則』を発見していた。

それは夢を一回見るごとに、夢の中で出てくる自分の歳が一つずつ増えていくことだった。

つまり今日は五歳の夢を見たのだから、美世の推論が正しければ、明日は六歳の夢を見ることになる。だが、なぜ一日ごとに一つずつ歳が増えていくのかは、よく分からなかった。

その時、美世は急に頭の痛みを覚える。

「うっ。いたたた……」

締め付けられるような激しい痛みにも、美世は顔を険しくさせる。

思えば、この五日間も働き詰めだった。

不景気の影響で美世の会社もなかなか厳しい状況であり、ここしばらくは残業続きだった。

昨日も帰ってきたのは、夜の十時前。

休みのうちに仕事の疲れを一気にとろうと、寝過ぎたのがいけなかったのかもしれない。

趣味と呼べる趣味も持っていない現在。

この五日間で目立ったことを挙げるならば、例の不思議な夢を見

たことくらいだった。

ようやく痛みがおさまり、美世はふらふらと着替えるために動くとする。

その直後、テーブルに置いてあった携帯が、いきなり鳴り始めた。時計を見ると、すでに正午。起きたばかりだが、別に電話が掛かってきてもおかしくはない時間帯ではある。

誰から来たのか確認すると、それは彼女にとってよく見る名前だった。

「……なんだ。和史か」

それは遠距離恋愛を続けている、美世の彼氏だった。通話ボタンを押す。

「もしもし。和史？」

「よっ、美世。——なんか、声がすごく低いな。寝起きか？」

「……正解。仕事で疲れて、ついさっき起きたばかりなのよ」  
電話越しの和史が笑い声をあげる。

人を元気にさせるような彼の笑顔が、美世には想像できた。

美世が和史と付き合い始めたのは、高校二年の十六歳からだった。同じクラスで一緒の係をやったことがきっかけで仲良くなり、そのまま交際に発展。

美世が東京に行くことを決意した時は、大ゲンカをしてしまい、一時は別れる間際まで悪化したものの、今は持ち直して遠距離での恋愛を続けている。現在、和史は美世の実家と同じ街にある専門学校に通っており、デザイナーを目指して日々勉強をしている。

和史との電話は三日ぶりだが、この時間に掛けてくるのは珍しかった。

「で、いきなりどうしたのよ」

「いや……そんなに重要な用件でもないんだけど、ホラ、もうすぐ

『あれ』じゃん」

「あれって？」

「とぼけてんのか？ 美世の誕生日だよ。誕生日」

和史の苦笑混じりの言葉に、美世はハッと息を呑む。

あまりに仕事が多忙すぎたせいで、今さら自分の誕生日が近づいていることに気付いた。

さらにこの瞬間、美世は『ある推測』を思いついた。

「おい。聞いてるか？ 美世？」

「えっ……ええ。聞いてるわよ。それで、誕生日がどうしたの？」

「その日、ちょうど日曜なんだ。だから、その日に地元で高校のクラスメイトでも誘って、軽くパーティーを開こうかなと考えてさ」

「あー。なるほどね」

ここから地元までは、特急電車を使えば二時間程度で着ける。

翌日は仕事だが、これくらいなら日帰りの行程でも問題はないと判断した。

「いいわよ。たぶん、その日は私も予定がないと思うから」

「オッケー。じゃあ、絶対に開けておけよ」

「分かった」

それから二十分くらい和史と雑談を交わして、美世は電話を切った。

電話を置いた瞬間、思わず笑みがこぼれてしまう。和史とは成人式の日に会ったばかりだが、誕生日に会うとなると、約一ヶ月ぶりの再会となるのだ。

そして美世は、壁に貼ってあるカレンダーへと向かう。

和史の言葉で発見した事実を確かめるためだ。

『一月二十三日』の部分に指を置いて、なぞるように日付を追ってみる。

日を進めていくごとに、美世の指は興奮でどんどん震えが止まらなくなっていく。カレンダーは二月へ進み、やがて指は『二月十二日』の位置で止まった。

——推測は、ついに確信へと変わった。

二月十二日。その日は、彼女の二十歳の誕生日だった。

そして、例の不思議な夢が始まったのは一月二十三日からである。

その日から美世の誕生日までの期間を数えると、ちょうど二十日。もし日を追うことに、夢の中の自分が一つずつ歳をとっていく推論が正しければ、夢の中の美世も二月十二日をもって二十歳となる。「これって私の誕生日に合わせるため、なの？」

美世が十九歳でいられる、最後の二十日間。

まさに、自分の十九年間の人生を『夢』という媒体で振り返る、不思議な二十日間となってしまったのだ。

これは偶然なのか、それとも神様が気まぐれで起こしたもののなか。

美世にはさっぱり分からなかった。

【03】6日目〜13日目（前編）

夢の法則が分かってから、一週間後の日曜日。

美世は日帰りで、両親のいる実家に帰ってきていた。

「ホント、一体どうしたのよ。急に昨日に『実家に帰ってもいい？』って電話が掛かってきて、てっきり仕事を辞めちゃったのかと思っただじゃない」

「もう。そんなに心配しなくてもいいって。仕事の方は大変だけど、辞める気はぜんぜん無いから。たまには息抜きでこっちに帰ってきてもいいじゃない」

「まあ、美世がそう言うんだったら、いいんだけどね」

優子は心配そうに見つめながらも、キッチンに戻る。

この前の昼休みにも、いきなり優子に電話を掛けてしまったのだ。ここ最近の美世の行動に若干の不審感を抱くのも、勘のいい優子なら仕方ないかもしれない。

美世が実家に帰ってきた理由は、単に昔のアルバムを見たくなくなったからだ。

すでに不思議な夢を見始めてから、十三日が経っている。

この一週間で美世が見たのは、どれも自分が小学校と中学校の頃に関する夢だった。

それらを振り返っていくうちに、美世の中で、その時代を過ごした故郷に少しでもいいから戻りたい気分が湧いてきてしまったのだ。実家に連絡したのは、昨日の昼ごろ。

残念ながら和史はすでに予定が入っていたため、今日会えることは叶わなかった。

最初は和史も予定を変更して会いたいと願い出てきたが、勝手にやってくるのは美世の方だったため、彼女の方から「無理しなくて

いいよ」と断っておいた。

「うんしょつと……」

美世は、押し入れから引き出した大量のアルバムをリビングのテーブルに並べる。

中学時代までのアルバムを全て持ってきたので、なかなかの重量だ。

キッチンで夕食の準備をしている母親の傍ら、美世はゆっくりとアルバムを開いた。

夕食の時間までまだ三時間あるし、父親の誠二はゴルフで夜遅くまで帰ってこないの、それまでじっくりと見ることができる。

美世が最初に見たのは、小学校の頃の写真だった。写真と一緒に説明書きされている紙が少し変色している所に、長い年月を感じさせる。

「うわあー。懐かしー」

改めて写真で確かめてみると、もう忘れたかと思っただ出来事が徐々に蘇ってくる。

遠足。運動会。学芸会。林間学校。そして一緒だったクラスメイトとの思い出。

そのほとんどは忘れてしまったが、写真を通して、美世は彼らと一緒に小学校生活を送ってきたのだという実感と懐かしさに浸った。やがて、美世は一枚の写真に手を止める。

「あつ。『てんちゃん』だ」

そこに映っていたのは、まだまだ背の低い美世と一匹のハムスターだった。

写真の彼女は笑みを浮かべながら、手のひらに一匹のゴールデンハムスターを乗せている。

今でも学校で実施しているかは分らないが、四年生の頃、美世のクラスでハムスターを飼ったことがある。名前は『てんちゃん』。性別はメス。命名理由は、背中あたりにぼつんと『点』のような斑紋がついてあったから。

五日前、美世が見たのは、ちょうどこの『てんちゃん』に関する夢だった。

ちょうどその日は、美世が『てんちゃん』の世話をする番だった。当時、ハムスターの世話係だった美世はクラスの中でも一、二を争うくらい『てんちゃん』のことが好きだった。

その日も美世は朝一番に教室に入って、『てんちゃん』のいるケージを覗いた。

そこで美世が見たのは、ぐったりと仰向けに倒れている『てんちゃん』だった。

何が何だか分からず、とりあえず朝の挨拶をしようと人差し指で突いてみた。

だが、その体は異様なくらい冷たくなっており、いくら美世が名前を呼んでも『てんちゃん』は動こうとしなかった。その十分後、次のクラスメイトがやってくるまで美世はただ呆然とケージの前に佇んでいるしかなかった。

やがて、事態を聞きつけた担任の先生がやってきて、クラスを代表して先生と二人で『てんちゃん』の体を埋めることにした。場所は学校の校庭の隅っこにある、みかんの木の下。

先生の話によると、『てんちゃん』はすでに寿命が近かったらしく、いつ死んでもおかしくない状況だったらしい。

この写真は『てんちゃん』がケージから消える、三日前に撮られたものだ。

美世は無言のまま、その写真をアルバムから取り出す。

「お母さん。この写真、持っていてもいい？」

「うん？ 好きにきなさいよ」

キッチンにいる優子は、ろくに写真を確認せず適当に答える。

美世は鞆からファイルを取り出して、その写真を丁寧に収めた。大好きだった『てんちゃん』の死は、小学校の頃の美世にとって一番の悲しい思い出だった。

『てんちゃん』を埋めてから一週間くらいは、誰もいなくなった

ケージをちよくちよく覗いては泣き出しそうになった。

悲しい思い出を振り返りながら、美世は小学校のアルバムを閉じた時だった。

小休止のつもりか、優子がキッチンからテーブルにやってきたのだ。

「どう？ 小学校の頃の自分を見た感想は」

「あの頃は本当に若かったなと、思った」

「まだピチピチの十九歳のあんたが、言うことじゃないわよ」

「でも、お母さんだって、まだまだ老けてないじゃない」

「ふん。娘に言われなかったって、私もピチピチのアラフォーですよーだ」

そう誇示するように胸を叩いてから、優子も適当にアルバムを取る。

美世の言ったことは、決してお世辞ではない。

優子は二十の時に誠二とできちゃった結婚をして美世を産んだため、ついこの間、四十を迎えたばかりなのだ。

おまけに一年前から近所のママさんバレーを始めたことで、少しぼつちやり気味だった体もだいぶ引き締まり、現在はとても十九の娘を持っているような母親には見えなくなってしまうていた。

「で、ママさんバレーの方はどうなのよ」

美世の問いかけに、優子は待っていましたと言わんばかりに答えた。

「ねえ、聞いてよ。実はこの間ね。近くの体育館で地区の大会があったんだけど、そこでなんと、うちのチームが優勝しちゃったのよ！」

「ええっ！ すごいじゃない！」

「それも最後のポイントを、私がズドンと決めちゃってね。アタックが決まったときは、本当に気持ちよかったわよ。あの瞬間のために、厳しい練習をしてきたんだと思った時は、ホントに涙が出てきそうだったわ」

「お母さん。言ってることがまるで中学生っぽいよ」

「そうそう！ 中学生と聞いて思い出したわ！ 美世が中学の部活で、初めて出場した時のこと。あの時、私も会場の隅っこで観戦してたんだけど、控えだった美世が最後にアタックを決めたじゃない？ あの時の美世のリアクションが、まさにそれだったのよ」

「ああ。あの時のことね……」

おそらく優子が話しているのは、中学一年の時、美世が部活のバレーボール大会で初めて得点をあげた時のことだろう。

美世自身も二日前、十二歳の自分がそのアタックを放った時の夢を見た。

地域の公立中学校に進学した美世が、部活として入ったのはバレーボール部だった。

経験など全く無かったが、当時は部が人数不足だったこともあり、最初の大会で美世は控えに入ることができた。そして終盤に美世がコートに入ることになり、味方のチームがマッチポイントになった直後、味方のトスに反応した美世が思い切りジャンプをして――。

あれが美世の公式戦、初めての得点だった。

二日前の夢を思い返してみると、優子の言われた通り、あの時の感動が今にも蘇ってきそうだった。なにせ、初めての得点が決勝点となってしまったのだ。

美世はアルバムをめくる手を止めて、小さく笑みを浮かべながら言った。

「なんか、思った以上にお母さん、今の生活を楽しんでいるよね」

「そうねえ。でも、バレーを始めるまでがいろんな意味で大変だったけど。美世が東京に行った途端、急にやることがなくなって、すごくイライラしてたんだから」

「お父さんと何回もケンカしたんでしょ？」

「そうそう。お父さんったら『仕事が忙しい』の一点張りで、私に何も構ってくれなかったんだから！ これだから男って奴はね」

しばらく誠二の愚痴を漏らしながら、優子も一緒にアルバムをめ

くる。

やがて愚痴が尽きると、今度はお互いの思い出話がメインとなった。

最初は美世の小学生時代のこと、それが終わると中学、高校と順々に時代が進んでいった。

その間も美世は台所から緑茶のティーパックとコップを用意したが、話が終わるころにはお互いに三杯も飲んでしまった。

やがて話題も尽きると、優子はゆっくりとアルバムを閉じた。

そして小さく息を吐いてから、優子はしみじみとした口調で言った。

「……美世のアルバムを見てきたけど、月日が経つのもってホントに早いわね」

「うん。ついこの間、私も成人式を終えたばかりだし」

「あつという間の二十年だったわね。私も、お父さんとできちゃった結婚であんたを産んだ後、子育てに必死で必死で仕方なくて——気が付いたら、もう四十代もの」

「でも、今の生活を楽しめているんだから、まだマシな方じゃないの？」

「そうね……。楽しんでるけどね」

優子は一拍、間を置いてから続けた。

「今の生活を楽しむ余裕ができちゃったせいで、育児で大変だった二十代と三十代が、あつという間に過ぎちゃった感じがどうしても出ちゃうのよね」

その言葉に、美世の体がわずかに震える。

「お母さん。それって……」

美世が言い出そうとした途端、優子は小さく吹き出した。

「何、困ったような顔してんの。ただ、あの頃の私はそれくらい大変だったんだぞ——って、言いたかっただけよ」

優子はパンパンと、美世の肩を何度も叩く。

「まあ、不景気で仕事も大変だろうと思うけど、美世もこれからや

つて来る貴重な二十代を無駄にしないように頑張っていきなさい。  
何か悩みごとがあったら、いつでも相談してあげるからね」

以前に比べて、叩く威力が上がった優子にたじろぎながら、美世はうなずく。

時計を見てみれば、すでに五時を過ぎていた。

どうやら二時間近くも、思いついで盛り上がってしまったらしい。

「あら、いけない！ 急いで夕食の準備をしなくっちゃ！」

優子もようやくそれに気が付いて、急ぎ足でキッチンに戻っている。

「……貴重な二十代、か」

ぽつんと取り残された美世が、小さくつぶやく。

外は夕日が沈みかけており、その残光が小さくアルバムを照らしている。

彼女も、あと一週間で二十代を迎えようとしていた。

自分も母親と同じように、光のようなスピードであったという間に二十代を終える人生を過ごしてしまうのか。その反面、アルバムに映っている十代の自分は、今の自分に比べてだいぶ輝いているように見えた。

美世はぼんやりとした目で、思い出の詰まったアルバムを眺めた。

【04】6日目〜13日目（後編）

実家で夕食を済ませた後、すぐに美世は東京に帰ることにした。明日もいつも通りに仕事があるので、なるべく早いうちに戻っておきたかったからだ。

外はもう暗い。帰り際に優子から大量の食材や雑貨類をもらってしまったので、今の彼女は行き以上の荷物を持ちながら、馴染みのある地元の道を歩いていた。

やがて、左右の分かれ道に差しかった途端、美世は急にその足を止めた。

「どうしようかな」

右の道に目を向けながら、美世は考える。このまま普通に左の道を歩いて、最寄りの駅に着いてしまってもいい。

だが、実家でアルバムを見てしまったせいで、美世は急に『ある場所』に行きたい気分になってしまったのだ。

そこは、母校の中学校だ。

美世がバレーボールを始める、きっかけとなった場所。

この道を右に曲がれば、五分くらいで校舎が見えてくるはずだ。

美世は携帯で時間を確認する。——行っても長居するわけでもないし、まだまだ時間も余っていたので、彼女はあっさりと右の道を進むことを選択した。

辺りはすっかり暗くなっており、道を歩いているのは美世しかなかった。

今日は日曜日なので、さすがに部活帰りの中学生は見当たらない。やがて、美世の視界に懐かしい建物が入ってきた。

「うわー。全く変わってないじゃん」

そこには相変わらず古臭さの漂う、美世の母校があった。

校舎はもちろん校庭の隅に佇んでいる桜の木も、ウサギを飼っている飼育小屋も、やたら背の高い鉄棒も、網の破れたバスケットゴールの位置も、美世が卒業した時と何ら変わっていないかった。

閉ざされた校門の前で、美世はあまりの変化のなさに微笑む。

校舎の中はどこも暗くなっていたが、奥の体育館の方はまだ電気が灯っていた。熱心な運動部が、まだ練習をしているのかもしれない。

だが、美世が視線を向けていたちょうどその時に、体育館の電気が消えた。

やがて、扉からスポーツバックを抱えた一人の人間が出てきて、ドアのカギを締めた。

目を凝らしてその姿を確認すると、体型的に女性のようにだった。

女性にしては背が高く、ボーイッシュに短く切り揃えた黒髪が特徴的だった。

あまりの偶然に、美世は一瞬——自分の目を疑った。

それは先日の成人式にも会った、美世の友人とまるで特徴が似ていたからだ。

「由真？　もしかして由真なの！？」

彼女の大声に反応した女性が、驚いたように校門に顔を向ける。

「え、えっ？　もしかして、美世？」

まさかの再会に女性は慌てて、校門の方に駆け寄ってくる。

近くで確認すると、確かにそれは由真の顔だった。

中学校のバレー部で一緒になって以来、高校を卒業するまで一緒だった美世の大親友である。

その大親友の顔を見たのは、昨日、夢に出てきて以来だった。

しばらく校門の前で待っていると、カギの返却を済ませた由真がやってきた。

「ごめんごめん。待たせちゃって」

「いいのよ。時間もまだあるから」

美世と由真は肩を並べて、駅の方面へ歩き始める。

ちようど、由真も今から帰宅するところだったのだ。

由真の家は中学校からだいぶ離れた所にあるのだが、今日は現在でも連絡を取り合っているバレー部の顧問から、後輩の指導にあたってくれないかと頼まれたので、わざわざここにやってきたらしい。

由真は美世とは違い、就職ではなく進学するコースを選んだ。

そして高校に引き続き、大学でもバレーを続けている。

由真は未だに興奮が醒めない口調で、美世に言った。

「まさか、こんな場所で東京に行っているはずの美世に会えるなんて、夢にも思わなかったよ。で、いったいどういう風の吹き回しで、ここに戻ってきたの？」

「う、うん……。ちよつと実家の事情があつてね」

「東京での仕事も大変だろうに、よく戻ってきたわね」

「あはは……。もう、その話は止めましょうよ」

さすがに、故郷が懐かしくなつて帰ってきたとは言にくい。すると由真は美世の顔をじろじろ眺めて、呟くように言った。

「うーん？ よく見てみると、何かちよつと顔色も悪いわね。本当は無理してやってきたんじゃないの？ 最近、バレーでも何でもいいから運動してる？」

「全くやってないわね。で、由真の方はどうなのよ。だいぶ元氣がよさそうだけど？」

「そりゃ、ついさつきまで後輩をビシビシ指導してきたからね。顧問の先生が『待った』をかけるまで、容赦なくスパイクを打ち込んだじゃったよ。おかげでストレスも解消できたし、後輩も私のおかげで多分スパイクに強くなつたと思うし、今日は精神的にも肉体的にも良い運動になったよ。満足満足」

「そついうのを意地悪な先輩と言つのよね……」

相変わらず体育会系の由真に、美世は苦笑する。

普段の彼女は、明るい性格の持ち主で、周囲からの人望も厚い。

だが、ひとたびバレーボールが始まると一変して、中性的な容姿も相まってか、とても凛とした表情を見せてくれる。

プレー中に彼女の切れ長の瞳に捉えられたら最後、その圧力とパワーに怖じ気づいてしまう人は後を絶たない。美世自身も中学校でバレーボールを始めてからは、由真と同じようにスポーツに情熱を傾けている少女だった。

そんな美世が由真と知り合ったのは、同じ中学校のバレーボール部からだ。

最初の一年間は、同じ部の『仲間』程度の認識でしかなかった。

だが、中学二年の夏、最悪、どちらかがバレーを辞めていたかもしれないくらいの大事件が起こった。

それはお互いのポジションを巡って、美世と由真が大喧嘩を起こしてしまった事件だ。

両者とも、物事をまだまだ自分中心に考えていた頃の出来事だった。

その事件の細かい出来事を、美世はつい十時間前の夢で見た。

一時はかなりの状況まで追いこまれたが、顧問やバレー部の仲間が体を張って止めたおかげで、最終的には仲直りできた。

結局二人は罰として、その年の秋まで大会に出させてもらえなかったが、これをきっかけにチームの団結力が著しく良くなり、次の冬の大会では初めて優勝を飾ることが出来た。

美世と由真が親しくなったのは、ちょうどその頃だった。

あれだけ大喧嘩していた二人が、今度は急速に仲良くなったので、周囲のリアクションも喧嘩した時以上にすごいものだった。

その後、二人は同じ県立高校に入学して、同じバレーボール部に入った。

今では会える回数こそ少なくなったが、一緒にバレーをしたり遊びに行ったりの仲が続けている。

「ちよつと美世。話、聞いてる？」

わずかに苛立ちのこもった由真の言葉に、慌てて美世は思考を止めた。

「えっ、えっ。どうしたの？」

「聞いてなかったの？ 一週間後にやる、美世の誕生パーティーのことよ」

「私の誕生パーティー？」

「うん。先日、和史くんから電話が掛かってきてね。一週間後に美世の誕生パーティーをやるから、一緒に友人を集めてくれないかと頼まれたのよ」

「へえーっ。和史からね……」

「実は今日の夜くらいに電話で言うつもりだったんだけど、今のうちに言っちゃうわ。——美世、当日は本当に私たちもパーティーに参加していいの？」

言葉の意味が掴めず、しばらく美世はきよんとする。

由真は困ったように頬を掻きながら、さらに言った。

「美世も、あとちょっとで二十歳になるじゃん。そんな大事な日に私たちを呼んでドーンとパーティーをやるよりかは、和史くんと二人つきりでやったほうがいいんじゃないかと思ってね。ほら……二人とも遠距離だし」

それは高校からの友人である和史と美世の気持ちを考えての、由真なりの気遣いだった。

三人とも高校二年の時に同じクラスであったため、和史と由真の間にも携帯番号を交わすくらいの友人関係が出来ている。二人が付き合い始めた頃から見守ってきた由真にとって、そう言いたくなるのはむしろ当然のことかもしれない。

心の中で友人に感謝しながら、美世は微笑んだ。

「大丈夫。私はみんなで祝う方が好きだから」

「そう？」

「和史も大人数の方がいいと思って、由真に電話してきたんでしょ？ なんか、ごめんね。和史が余計なこと頼んだせいで、由真に変

な心配かけちゃって」

「美世がそう言うんだったら、私はそれでいいわよ。——ふふん。そうと決まったら、私も知り合いに片っ端から電話して、盛大なパーティーを開かなくっちゃね！」

「大人数すぎても困るけどね……」

楽しい会話はあつという間に過ぎ、やがて二人は駅に到着した。もっと由真としゃべりたいのは山々だったが、そろそろ時間も押していたので仕方なく諦めた。

お互いに電車の方向が逆だったため、改札口で別れることとなった。

「じゃあね、美世。来週、楽しみにしててよ」

「うん。ありがと」

スポーツバックを抱えた由真が、離れようとする。

その直前、美世はつい声を掛けてしまった。

「ね、ねえ。由真」

由真の体が止まって、こちらを振り返る。

「んっ？ なに？」

「そういえば、由真の誕生日って『四月九日』だったよね？」

「そうだけど」

「じゃあ、あと二ヶ月で二十一歳になるんだ」

「当たり前でしょ」

美世は一瞬迷ったが、思い切って訊いてみることにした。

「ちよつと早いかもしれないけど——二十歳の自分の生活を振り返ってみて、由真はどう思った？」

「はっ？ 二十歳の生活？」

「うん……そう……」

得体の知れないものを見ているような由真の表情が、美世を捉える。

微妙な沈黙が流れた。その間にも、改札には人がどんどん流れていく。

美世は少しだけ、質問したことを後悔した。質問するにしても、状況があまりに唐突すぎた。

由真は困ったような顔を浮かべてから、

「べ、別にバレー漬けの生活だったと思うけどね」と、小さく答えた。

「まあ、そうなっちゃうよね」

「う、うん……」

そううなずいてから、由真は視線を逸らすように電光掲示板を見上げる。

すると、彼女が乗る予定の電車が、あと一分で出発するという表示が出ていた。

「ごめん。次、乗らないとダメなんだ。そろそろ行くね」

「あつ、由真！」

こうして、由真はそそくさと逃げるように反対側のホームに行ってしまった。

彼女の姿が視界からいなくなった後も、美世はしばらくその場所に佇んだままだった。

そして、どうして唐突にあんな質問を言ってしまったのだろうと考えた。

元氣そうな優子といい、バレーをやっている由真といい――。その姿が東京で地味に働いている自分に比べて、何倍にも輝いて見えてしまったからだろうか。

どこか遠くの方で、カンカンと踏切の音が聞こえてきた。

【05】14日目〜17日目

美世が帰ってきた後も、相変わらず不思議な夢は続いた。

十四歳。受験戦争の真っ最中に、美世は初めての恋をした。

相手は通っていた塾の先生だった。俳優並のルックスと優しく丁寧な教え方で人気があり、美世も瞬く間に彼の虜になった。

だが、言うまでもなく美世以外の女子も黙っておらず、先生の周りには常に人がいた。

そこまで積極的な性格でもなかった美世は、なかなか話しかけることができず、ただただ——もどかしだけが溜まっていく一方だった。

由真と一緒に同じ高校に行こうと約束していたため、何とか勉強のモチベーションは維持して、志望校に合格することはできた。

しかし、告白は最後までできず仕舞いで、美世の初恋は終わった。合格の報告に行った際、先生に「おめでとう」と言われ、握手された時の笑顔は今でも忘れられない。夢の中でも、その顔は鮮明に映っていた。

十六歳。高校二年の時に、美世は初めて彼氏を持った。

和史と話し始めたきっかけは、一緒に文化祭の実行委員になったからだった。

その年、美世のクラスは『お化け屋敷』という大がかりな出し物をすることに決まり、その準備もなかなか熾烈なものであった。

最初はあまり言葉を交わさなかった二人だったが、実行委員のため自然と会話をするようになり——文化祭が大成功を収めた直後に至っては、近くのファミレスで一緒にお祝いの乾杯を交わす仲にまで発展してしまった。

それをきっかけに二人はちよくちよくデートに出かけるようになる

り、やがて告白。

場所は駅前の公園のベンチで、最初に切り出したのは和史の方だった。

それから二ヶ月後にファーストキスを体験し、七ヶ月後には初めて彼の体を覚えた。

部活を引退した直後のことなので、ちょうど十七歳の夏頃である。その夢を見た直後は、あまりの衝撃に美世はしばらくベッドの上で動揺してしまった。

こうして、夢の中の彼女も着々と二十歳に近づこうとしている。和史から電話が掛かってきたのは、誕生日の三日前の夜だった。

その日の夜、和史から誕生日パーティーの件についての電話が来た。

人数は十人くらいが集まる予定で、美世の知っている親友の家で行われることになった。

「なんだか声だけ聞いてると、だいぶ疲れているようだけど大丈夫か？」

「ああ。大丈夫大丈夫……。忙しいことには、もう慣れてるから」苦笑いをしながら、心配そうな声の和史に対応する。

今日は木曜日。疲れもそろそろピークに達する頃だ。

おまけに、この四日間は職場の上司に叱られっぱなしで、精神的にもだいぶ参っていたのだ。

例の夢を見始めてから、美世はあまり仕事に集中できなくなっていた。

気付いたら昔の思い出で頭が一杯になり、ボーッとしている彼女に対して、上司から怒りの言葉を浴びせられるパターンが相次いだ。職場の人間関係に関しては、同僚とはそれなりの関係を築いている美世だが、上司との関係はあまり良くなかった。ねちねちと部下に当たり散らすタイプの人間で、仕事の要領が悪い美世は、よく格

好の対象として狙われるのだ。

この四日間の怒られた回数も、今までに比べて特に多かった。

その理由の一部は美世にもあるのだが、さすがに何度も怒られ続けては溜まったものではない。

「そうか。大変だろうと思うけど、あまり無理するなよ」

「うん。分かってるって」

和史の優しい声が、美世の心にやすらぎを与える。

この二年間、仕事が嫌で泣きそうになった時、いつも和史が美世を励ましてくれた。

今でもこうして仕事が続けられるのは、彼のおかげだと言ってもいい。

美世は、もう少しだけ会話を続けたくなった。

「ねえ、和史」

「どうした？」

「実は最近ね。不思議な夢を見ていてね——」

別に隠す理由もないので、美世は例の『夢』を話してみることにした。

『夢』の話进行他人に打ち明けるのは、これが初めてのことだ。

電話口の和史も、最初は信じられないような言葉を漏らしていたが、美世が細かい説明を進めていくうちに、段々と口調も真剣になつていった。

「……本当に不思議な夢だな。つまり、美世が今まで味わってきた経験や思い出が、一日ごとに一歳ずつ増えていく感じなんだろう？」

「そう。——で、夢の中の私も、三日後には二十歳を迎えるの」

和史は「うーん」と悩んでいるような声をあげて、さらに訊いた。「それらの夢の内容は全部、美世が実際に経験したことでいいんだな」

「ええ。さすがに赤ちゃんの頃の記憶は、お母さんから聞いた話だから断定できないけど、幼稚園の運動会で転んだ夢とか『てんちゃん』を埋めた夢とか、由真と大ゲンカした夢とかは、今でもしっか

り覚えてるわ」

「なるほど。つまり、美世が今まで経験してきた『印象的が思い出』が、毎日、夢となって出てきているというわけなんだな」

「あつ……」

その発言を聞いて、美世は初めてその事実気付いた。

考えてみれば和史の言う通り、夢の内容はどれも彼女にとって子供時代の印象的な思い出ばかりだった。親友との別れ。バレエボールでの初得点。初めての恋。初めての彼氏。初めてのキス。そして、初めての――。

まるで、映画の印象的なシーンだけを切り取って一つに繋がったかのようなだった。

映画。

その言葉が思い浮かんだ瞬間、美世は自分一人で納得する。

これまでの二十年間の人生を、ドキュメンタリー映画化したみたいなもの。

それこそがこれまで見てきた夢の内容だったのだ。しかも、あと少しで十代を終えるこの時期に。

電話越しの和史は、納得したように言った。

「なるほど。だから、この前の日曜に地元に戻ってきたんだな」

「うん。昔の夢を見ちゃったせいで、ちょっと戻りたくなつたのよ」

「……戻りたくなつたか」

和史は少し間を置いてから、声のトーンを落として言った。

「なあ、美世」

「なに？」

「その『戻りたい』っていうのは、もしかして学生時代の自分にか？」

その言葉に、美世はピクンと体を跳ねらせた。

「あはは……。まあ、百パーセント否定はしないけど、そんなこと考え続けても仕方ないでしょ？ 学生時代は二度と戻ってこないのは、とつくの昔に分かつてることなんだからさ。――もう、和史っ

たら、何いきなり変なこと言っちゃってんのよ！」

やや声を荒げて美世は反論したが、和史は何もしゃべってこない。突然の様子の変化に戸惑いながらも、美世は恐る恐る尋ねる。

「ねえ……和史。一体、どうしたの？」

「ああ、ごめん。ちよつと確かめたいことがあつてな」

「確かめたいこと？」

「うん。美世には話すなと念を押されたんだけど、この際だから仕方ないか」

見慣れているのに、美世は無意味に部屋を見回してしまった。

「実は一昨日に、由真から電話が掛かってきてな。最初は三日後の誕生パーティーについての内容だったんだけど、最後に妙なことを言ってきてな。先日、偶然に美世と再会したらいいんだけど、その時の様子がおかしかったって話してくれたんだ」

「由真から？」

その問いに、和史は「ああ」と返す。

電話での会話とはいえ、妙な緊張感が伝わってきた。

「別れる直前、由真におかしな質問をしただろ？『二十歳の自分を振り返って、どう思った』とか。どうしていきなりあんな質問してきたのか、あの後、由真もすごく気にしててさ。だから、俺に電話してきたんだと思う」

「ああ、あの時ね」

普段は明るい性格をしている由真だが、妙に繊細な所がある。

きつと、彼氏の和史なら何か分かるかもしれないと考えて、こっそり電話をしてきたのかもしれない。

美世は、少し苛立ちを込めて言った。

「でも、それがどうしたっていうの？ たまに地元に戻ってくるのとが恶いっていうの？」

「そうじゃない。ただ……もしかしたら美世が東京での暮らしが嫌になって、地元に戻ってきたくなってしまったんじゃないかと思っただ」

「ああ、そういうことね……」

それを聞いて、ようやく美世は納得した。

確かに地元に戻ってきた時、その考えが思い浮かばなかったわけではない。

だが、美世にとって、それは余計なお世話でもあった。

「あのね、和史」

「うん？」

「私が地元に戻りたいって思ったのは、別に今回が初めてじゃないわよ。これでも東京で仕事を始めた時から、何度も『地元に戻りたい帰りたい』って思ってきたんだから。なんの悩みもなく、仕事をやっているといたら大間違いよ。ぜんぜん仕事が進まない時とか、嫌いな上司にこっぴどく叱られた時とか、同僚から悪口を言われた時とか——数え切れないほど、嫌なことだって味わってきたから。」

でも、それに耐えて、ようやく東京での暮らしに慣れたのよ。まあ、和史も由真もまだ本格的に就職しているわけじゃないし、なかなか想像しにくいことだと思うけど」

電話越しの和史は、黙っている。

ようやく声のトーンを落として、美世は続けた。

「だから、相変わらず仕事は大変だけど、まだ地元に戻るつもりはないから安心してちょうだい。せっかく慣れた生活を投げ出すなんて、絶対に損よ」

「……そっか。美世がそう言うんだったら」

「あれっ？　もしかして、私が地元に戻ってきてほしいと思って、さっきの質問をしてきたの？　それだったら、残念だねー。あと少しだったのに」

「うっ、うるせーな」

先ほどの空気とは一転、美世の冗談に二人とも笑い声をあげた。それから十分程度、二人は雑談を交わして、ようやく美世は電話を切った。時刻は午後十一時。明日もお互いに朝が早いので、これ

でも早めに切った方だった。

就寝の準備はとくに済んでいるので、美世はそそくさとベッドに入る。

そして目を瞑りながら、彼女は先ほどの電話の内容を思い返した。和史の言ったことは、あながち間違いではない。

例の夢を見始めたことをきっかけに、美世はだいぶ子供時代のことを意識するようになった。

これまで零歳から十七歳までの思い出を見てきたが、どの思い出も恥ずかしくも微笑ましくあり、そしてもう二度と戻れない寂しさも感じた。

和史にも話したように、現在の美世は仕事を辞める気など全くない。

つらいことも多いが、それは社会人として仕方ないことである。

だが、その一方で美世は得体の知れない不安も感じた。どうして、そんな不安を抱くのか——少し考えなくなったが、今は早く眠った方が得策である。

今日は高校を卒業した後、十八歳の頃の夢を見る。

美世は布団の中でもぞもぞと動きながら、何とか眠ろうとする。

今日は気温が低いせいか、なかなか体が温まらない。

だが、寝られる時間も限られているので、何とか眠れるように努力する。

——どうか、今日もいい夢が見れますように。

そう小さく祈りながら、やがて美世は眠りについた。

毎日、仕事におおわれている自分の姿が、夢の中で早送りに流れていった。

それは、あまりにあっけなく——あっという間の夢だった。



【06】18日目、19日目

二月十日。美世は呆然とした顔で、起床した。

慌てて目覚まし時計で確認すると、午前六時二十分。

窓に視線を向けてみると、すでに太陽が眩しく光っており、いつも通りの冬晴れの朝を迎えていた。

何が何だか理解できず、美世はボサボサになった自分の頭を触ってみる。

今日の見た夢は、これまで見てきた夢とか明らかに内容が異なっていた。

和史の推測が正しいとすると、昨日まで見てきた夢は、美世がその歳に体験した印象的な思い出を映してきたが、今日の夢はあまりに『あつという間』に過ぎてしまったのだ。

まるで、映画を早送りにしたかのように。

一応、夢の中では会社の制服を着た自分を確認することはできた。面倒臭そうな顔で仕事を行っていたり、一人で昼食を摂っていたり――まだ周囲の空気に馴染めていない、入社したばかりの美世の姿だった。

呆然としているうちに、時計は五分も過ぎてしまっていた。

「は、早く支度しなくっちゃ……」

朝の五分はとても貴重だ。

ひとまず美世は考えるのを止めて洗面所へ向かう。

あまりの寒さに体がぶるぶるっと震えてしまうが、そこは致し方ない。

ドアを開けて、備え付けてある鏡の前に立つ。

その瞬間、鏡にいる自分自身と目が合った。

長い黒髪、やや引き締まった顔の輪郭、少し垂れた目。

その姿は、上京した二年前から全く変わっていない。しかし、今の美世はあと二日で二十歳になるのだ。上京したばかりの十八歳の自分はあつという間にいなくなり、ここにはもうすぐ二十歳となる自分がいる。

今日の夢のように——十八、十九歳の自分はあつという間にいなくなってしまったのだ。

急に、その二年の月日の流れが、速いように感じた。

その瞬間、美世の心に得体の知れない大きな不安が襲った。

「い、いやっ……」

鏡に映っている顔が、どんどん青ざめていく。

これからの自分が、あまりにちっぽけな存在に思えてしまった。

目の前に存在している十九歳の顔も、いずれはどんどん老けていくだろう。二十歳、三十歳、五十歳——そして、やがて訪れるであろう死。

もしかして、自分は『あつという間』に歳をとって死んでしまうのか？

「い、いやあつ！」

震える体を抱きしめながら、美世は一人で叫んだ。

どれもこれも、今日の不吉な夢のせいだった。

あれでは、まるで自分の十八歳の思い出が何も無かったとも言い取れるのだから。

その考えを無理やり振り払うように、美世は勢いよく蛇口を捻って顔に水を浴びる。

だが、すっかりお湯の設定を忘れてしまったので、あまりの冷たさに思わず美世は裏返った声をあげてしまった。

その日の仕事で、美世はある大きな失敗を犯してしまった。

いらなくなった書類をシュレッダーで処分するという仕事を行ったのだが、美世のミスで重要な書類をシュレッダーにかけようとし

てしまったのだ。

幸い、最初に同僚が気付いたおかげで被害は数枚程度で食い止められ、データもバックアップ分が残っていたので大事には至らなかった。

しかし、通常では考えられない大ミスに、いつもの上司はおろか他の上司からも、盛大なお叱りを受けてしまった。もしかしたら、その場の勢いでクビと言ひ渡されてもおかしくないような、久々の大噴火であった。

美世自身も、こんな所で大きな失敗を犯してしまった自分を責めた。

いくら今日の夢がショックだったとはいえ、勤務中にそれを引きずって、重大なミスを犯してしまうとは情けない。上京以来、全く成長していない自分のひ弱な精神力を恨んだ。

仕事が終わりに、家に帰ってきた後、美世は久しぶりに一人で泣いた。

明日が祝日で本当に助かった。もし明日が平日だったら、果たしてちゃんと会社に行っていたかどうか美世自身も分からないくらい、今日は精神的に参ってしまった。

そして、服もろくに着替えずにそのまま眠った。

だが、追い打ちをかけるかのように、その日の夢も『あつという間』だった。

会社の制服を着た美世が早送りで流れていき、最後は涙目になりながら上司に何度も何度も頭を下げている自身の光景が映った。それは他ならぬ、昨日の光景であり――。

「いやあっ！」

叫び声をあげながら、美世はベッドから起き上がる。

思い出したくなかった光景が再び蘇り、美世は泣きそうになるのを何とかこらえた。

窓の外を見てみれば、憎たらしいくらいの青空が広がっている。

荒い呼吸をしながら時計を確認してみると、すでに時刻は朝の十時

を過ぎていた。

二月十一日。誕生日の前日。

その日は、最悪の目覚めと言っても過言ではなかった。

起きてからすぐに、美世は半ば衝動的に携帯の通話ボタンを押した。

かけた先は和史ではなく、由真だった。何となく和史に自分の声を聞かせたくなかったので、親友である由真にかけてしまったのだ。数回のコールの後、由真が出た。

「もしもし？」

「も、もしもし……。由真？」

「んっ？ その声って美世？ 美世なの？ なんか、声がすつごく枯れてるように聞こえるけど、なんかあったの？」

「ゆ、ゆ、由真……」

「ま、まずは落ち着いて。ちゃんと話は聞いてあげるから、ね？」

「……由真あ」

美世はすっかり弱気になった声を紡ぎながら、説明を始めた。

由真には不思議な夢のことを話してなかったたので説明は長くなつたが、由真もただならぬ心配を察してか、途中からは何も言わずに説明に耳を傾けているようだった。

「つまり、上京した後の夢が、あまりにもひどかったということね」

「うん……そしたら、急に不安になってきちゃって」

由真は、微かに驚いたような声をあげる。

「え、えっ？ どうして、いきなりそうなるわけ？」

「だって、もう……私、明日で二十歳になるのよ？ 今日まで、この十九年間のいろんな思い出を夢で見てきたわ。嬉しい思い出もあれば、辛い思い出もあったけど、どの思い出も本当に楽しめた。だから、一週間前に日帰りだけど地元に戻ってきたのよ」

あまりに部屋が寒かったので、電話を持ったまま美世は暖かいベ

ツドの中にもぐる。

そして、小さく体を震わせながら美世は子供のような口調でつぶやいた。

「……ねえ、由真。上京してからの私って何なのかな？」

「み、美世？」

「失敗ばかりしてるけど、仕事は頑張っているし、知り合いも少ないけど作ることができたし、このまま仕事を続けたい気持ちだつて一応あるわ。——でもね。もし、このままの生活を続けていたら私もあつという間に歳をとって、あつという間に死んじゃうのかと思つたら、だんだん不安になってきて……。だって、上京する前と後の夢の内容が、すつごく差が激しかったんだもん。まるで、上京してから二年間が空っぽで——仕事しかやってない、ちっぽけな人間に見えちゃって……」

この時、ふと美世は実家から持ってきた『てんちゃん』の写真を思い出した。

クラスの人気者でみんなから愛されていた『てんちゃん』も、あつけなく死んでしまった。

ケージでぐったりと倒れている姿は、今でも美世の脳裏に強く焼き付いている。自分もそう遠くない未来に、『てんちゃん』のようにあつけなく死んでしまうのか。

一度きりの人生——しかもこれから何十年も、こんな生活を続けるだけでいいのか。

美世の不安が、極致になろうとした瞬間だった。

「落ち着いて、美世！」

電話越しからの声が、やけに美世の頭に大きく響いた。

「美世の言いたいことはよく分かる。今の生活が嫌になって、学生時代に戻りたいとか、今の生活を辞めたい気分になる時だってあるかもしれない」

由真はいったん息を吐いて、さらに続けた。

「——でもね。なにも、そう思っているのは美世だけじゃない。私

だって、何度も思ったことがあるのよ。こんなバレエばかりやっている人生で本当にいいのかって。もっと、恋愛とか勉強をやったほうがいいんじゃないかって、思った時もあつたんだから」

「で、でも……」

「分かってる。くどいけど美世の不安な気持ちは、私にもよく分かる。そりゃ世間的に見れば、私たちはまだまだ若い年齢かもしれない。でもね——。二十歳の人だろうと四十歳の人だろうと果てまたは九十歳の人だろうと、自分のこれまでの人生を振り返って『良かった』って思う人は、意外と少ないんじゃないかな？ 偉そうな口を叩くけど、人生っていうのは所詮、後悔の連続だよ。でも、大事なのはそれを嘆くんじゃなくて、後悔してもいいから今の時間を全力で過ごすってことなんじゃないのかな。やらないで後悔するより、やって後悔するほうがマシって感じ？」

まあ、そう言う私もバレエを必死でやっているにはやっているんだけど、なかなか上手くいかないもんで……。前向きな考え方をしているても、いつも後悔してばっかで、時々ジレンマすら感じちゃうこともあるんだよね。ホント……」

由真の苦笑が、微かに聞こえる。いつもあれだけ明るく振る舞っている由真が、意外にも美世と同じようなことで悩んできたとは、とても驚きだった。

彼女の話聞いているうちに、いつの間にか体の震えが止まっていた。

「あつ。そうだ」

その時、由真は思いついたように声をあげる。

「美世。今日の予定は空いてる？」

「一応……」

「じゃあ、思い悩んでいる美世のために、いつちよまえに私が動いてやりますか」

「えっ、えっ？ 一体、何をするの？」

「前夜祭よ。美世が十代を終える今日にね」

そして「十分くらい待つて」と言い残して、由真は電話を切ってしまった。

気になって仕方なかったので、ベッドに潜ったまま美世は待ち続ける。

やがて、本当に十分して電話が掛かってきた。

しかし、相手は由真ではなく——和史からだった。

何が何だか分からなかったが、とりあえず美世は通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「もしもし。由真からあらかた話は聞いたぞ。……ずいぶん、思い悩んでいるみたいだな」

「……うん。何かごめんね。いろいろと迷惑かけちゃって」

「それに関してだけど、実はさっき由真から提案があっただ。美世のために、突発だけど前夜祭を開こうってことなんだけど」

「——ええっ？」

それを聞いて、美世はつい間抜けた声を出してしまった。

「そ、それって、どこでやるの？」

「地元で。だから、今から俺が車で美世の家まですっ飛ばしていく。三時間くらいで到着する予定だから、その間に一拍ぶんの荷物を用意しておけよ」

「そんな、いきなり言われても……」

「今日は何も予定がないんだろ？ だったら、三時間で充分じゃん」

「でも、確か今日——和史の方に予定が入っていたんじゃない？」

受話器から、苦笑を漏らす声が聞こえてきた。

「安心しろ。もう相手の方には連絡して、謝っておいたから」

それから五分ほど細かい予定を聞いて、美世は電話を切る。

すぐにベッドから出て、大急ぎで準備を始める。時間はたったの

三時間。

和史がここに到着したら、すぐにＵターンして地元に戻る予定だ。ちなみに実家に泊まるには連絡が遅すぎたので、今晚は和史の部屋

に泊まることが決まった。状況がイマイチ把握できない所もあったが、ひとまず今は準備をすることに専念する。

時間はあつという間に過ぎ、二時半頃に和史の車がアパートの前に到着した。

親から譲ってもらった、白の古めの中古車である。窓からそれを確認した美世は、荷物を持って急いで部屋から出ると、久しぶりに見る顔が彼女を迎えてくれた。

「よつ。ちよつと疲れたような顔だけど、元氣そうだな」

すらりと伸びた長身に、短く刈り込まれた黒髪。精悍な顔立ち。

彼こそが高二の時から、美世と付き合っている彼氏——和史だった。

嬉しくも恥ずかしい気持ちになりながら、美世は「うん」と頷く。「よし。時間もないし、とっと行くか」

車が目的地に到着すると、由真が手を振って迎えてくれた。

「美世、久しぶり——って、たった一週間ぶりだけどね」

「うん……」

助手席に乗っていた美世が外に出ると、冷たい風が長い髪を撫でる。

時刻はすでに六時。今日は祝日のためか高速もだいぶ混んでおり、結局、約束ギリギリでの到着だった。運転席の和史も、だいぶ疲れたような顔で外に出る。

由真が指定してきたのは、駅前の駐車場だった。

「突発で決めたくせに、明日のパーティーに参加するほとんどが来てくれたわよ。みんな、美世が悩んでいると聞いて駆けつけてきたんだから、後で感謝しなさいね」

由真からいろいろと説明を受けながら、三人は駐車場を出る。

やがて、駅前で待っている集団を見つけて、由真が大きく手を振った。

「おーい！ 主役が到着したわよ！」

声に反応した集団が、一斉にこちらを振り向く。

そのどれもが、美世の見知った顔だった。

「美世、元気なさそうだけど大丈夫？」

「おーっす、美世！ また会ったな！」

「久しぶり。一ヶ月ぶりかな？」

美世は思わず声をあげる。

「加奈、智也、史織——それに浩史までいるじゃない！」

どれも高校二、三年の時に一緒のクラスだった人たちだった。

編成の都合上、美世のクラスは高二からクラス替えが行われなか

った。

そのせいもあってか、今でもそのクラス内での交流が積極的に行われている。

実際、美世は彼らに会ったのは成人式後のパーティー以来である。どうやら、今日の参加者は美世たちを含めて七人のようだった。

主催者の由真が、近くのビルにある居酒屋の看板を指差す。

「どうやら、そこが今回の前夜祭の場所のようだった。」

「いい？ 今日とは明日で無事二十歳を迎える美世に対して、十代最後の思い出を作らせるために飲み会を開くんだからね。前夜祭とはいえ、適当にやるのはダメだよ！」

周りが次々とうなずく中、美世だけが驚いたように由真を見据えた。

「ゆ、由真。もしかして、そのために」

「ほら。行こ——」

由真は何も言わず、ただ美世の肩をトントンと叩いてから前に進んでいった。

十代最後の飲み会は、それこそ『楽しい』の一言に尽きた。

「あと数時間で二十になるんだから、関係ないでしょ！」という由真の言葉と共に、美世も半強制的に酒を吞まされ、終始——どんちゃん騒ぎとはいかないものの——ほどよいテンションで盛り上がった。

和史は車の関係で吞めなかったものの、それ以外は由真を筆頭によく吞み、高校時代の思い出話などで話題も絶えなかった。

美世も朝の陰鬱だった気分も次第に晴れていき、積極的に会話に参加するようになった。

楽しい時間もあっという間に過ぎ、一行はほろ酔い気分で居酒屋を出た。

特に由真は酒に弱いくせに最初からハイペースで吞み続けたので、

外に出た時は仲間の史織と加奈に肩を貸されながら、千鳥足でふらふら歩いている有様だった。

この事態に、加奈は呆れながら言った。

「仕方ないね。今夜は私の家に泊まらせてあげるから……ほら、しっかりしてよ由真」

「ううーっ。ごみえーん……」

他の面子もだいぶ酔っている状態だったので、二次会を開くのは止めにして、駅前の広場で解散することで決定した。

駅前の広場に到着すると、真っ先に美世は全員に向けて頭を下げた。

「みんな。今日は私のために集まってくれてありがとう。もう、これで十代に思い残すことは無くなったわ。また明日も盛り上がりましょうね」

酒の影響もあるが、気分もだいぶ良くなったのは事実である。

由真と和史を含め、参加してくれた仲間には言葉では言い尽くせないほどの感謝をしているが、今はこれで精一杯だった。

「美世ーっ！ 大好きだよーっ！」

その時、由真が不安定な足取りながら美世に抱きついてきた。酒臭い匂いと、ふわりとした甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

普段の彼女なら、こんな行為など絶対にしない。あまりのことに美世を含め、誰もが目を疑ったような顔をしていた。

「ちょ、ちよっと、恥ずかしいから離れてよ！」

「……良かった。美世が元気を取り戻してくれて、本当に良かった」いきなり落ち着いた声に戻った由真に、美世は思わず口を閉ざす。由真は顔を耳元まで寄せて、小さくつぶやいた。

「……すっごく怖かったのよ。不器用だけどいつもしごとく頑張っている美世が、今にも泣きそうな声で電話を掛けてきたんだから。だから、美世を励ますためにいろいろ私も喋ったつもりだけど、それだけじゃダメだと思った。」

だって美世ったら、今後の人生について本気で悩んでいるんだも

ん。私もつい衝動で前夜祭を考えたけど、これで美世が楽しめなかつたらどうしようって、すごく怖かったんだから……。こんな私が口で美世にしっかりアドバイスできるほど、器用な人間じゃないのは分かっているでしょ？」

由真の体が、わずかに震えている。美世は何も言い返せない。

「美世は、東京で大変な仕事を二年も続けているんだよね。バレーばかりやってる私なんかより、何十倍も頑張っているんだよね。私には想像しにくいけど、そこでの仕事はきつと辛いことばっかりになる時だってあるかもしれない。

でもね。何か困った時があつたら私や加奈たちがいるから——だから、弱気にならないで。時間があつたら和史でも私でもいいから一緒に旅行に出かけたり地元で遊んだりして、いろんな思い出を作っていこうね。やっと……やっと、美世も明日で二十になるんだからさ。美世の人生は、まだ始まったばかりじゃない」

「……うん」

美世は小さく頷きながら、彼女の体を抱きしめる。

分厚いコートを着ているのに、不思議と彼女の暖かさが美世にも伝わってきたような気がした。

やがて由真は美世を解放して、赤くなった顔に「えへへ」と苦笑を浮かべる。

それに釣られて、美世もぎこちなく口元を吊り上げる。ここで由真は高々と腕を突き上げた。

「それじゃあ加奈の家に行って、さらに吞みますか——っ！」

「吞みすぎだ、アホ」

すかさず、和史が平手で由真の頭を軽く叩く。

上機嫌に笑みを浮かべながら頭を撫でる由真に、すかさず加奈がやってきて彼女の体を支えた。

「じゃあ、私たちはそろそろ帰るから。——ほら、行くわよ。由真」

「美世、和史——っ！ また、明日ね！」

その場に美世と和史を残して、一行はそれぞれ散っていった。

前方でふらふらとした足取りで駅に向かう由真の後ろ姿を眺めながら、和史が言った。

「美世。俺が言うのもおかしいことだけど、由真のことは絶対に大切にしろよ。いくら親しい仲だからといって、ここまで心配してくれる奴はそうそういないぞ」

「そうだね」

「俺が思うに――」

和史は少し恥ずかしそうになりながら、言葉を紡いだ。

「二十歳になっても三十歳になっても、変わらないものを一つ挙げるとしたら、それはお前らの関係ってやつじゃないかな。まあ、一言でまとめると『友情』なんだろうけど」

「うん……」

その言葉に頷きながら、美世も駅に向かっていく由真を眺める。

いつも明るい笑顔で周りを引っ張ってきた由真が、ここまで自分のために動いてくれたのだ。あまりのことに思わず涙が出そうになったが、和史の前であるので何とかこらえる。

駅前の時計を見ると、すでに十時半を回っていた。

「どうする？ そろそろ俺の家に行くか？」

「……いや、もう少しだけ休憩したいわ。ちよつと飲み過ぎちゃって」

「だったら、近くの公園のベンチで少し休むか？ そこなら人も少ないし、風に当たってすぐに酔いも醒めるだろうし」

その言葉を聞いて、美世はすぐに和史の意志を察した。

彼の言う『近くにある公園のベンチ』と言えば、あの場所しか思いつかない。

「うん。そうしょ」

少し歩いて、二人は駅の近くにある公園に到着した。

駅前なので規模もそれなりに大きく、昼には多くの人が訪れる。

だが、さすがに日も替わる前の時間帯には、どこにも人は見当たらない。

美世たちは奥のエリアにあるベンチを見つけると、迷うことなくそこに座った。手もだいぶ冷たくなっていたので、入る直前に和史が買ってくれた缶コーヒーで手を温めながら、それをプシュツと開ける。

一口飲んで息を吐くと、コーヒーの匂いが混じった白の吐息が出てきた。

「どうだ。酔いは醒めたか」

「少しね」

和史は周りを見渡して、懐かしそうに言った。

「美世、この場所を覚えてるか？」

即答で美世は答える。

「うん。十六歳の時に、和史が私に告白した場所でしょ」

「へーっ。意外。よく覚えてたな」

「だって、十六歳の時の夢に出てきたんだもん」

「ああ、なるほど。それは予想外だった」

苦笑しながら、和史も缶コーヒーを飲む。

「今だから言えるけど、俺、女性と付き合うのは美世が初めてだったからさ。告白を絶対に成功させようと、決行日の直前までいろいろと計画を練って、最終的にこの場所に決めたんだ。だから、今でもこの場所は忘れられないんだ」

「……私だって、そうよ」

これまで十九年間の様々な夢を見てきた美世だが、そのどれもが完全に忘れていたわけではない。

さすがに細かい所はそうでもないが、初めて和史から告白を受けた瞬間は、今でもしっかりと記憶に焼き付いている。

「あの日は、今日のように木枯らしが吹いていて寒かったよね。最初はどうしてこんな寒い所でデートするのか、少し疑問に思っていたんだけど」

「やっぱり、告白するんだったら外の方がいいと思ったんだ」

「私は中でも、別に構わなかったけどね」

「べ、別にいいじゃねえかよ……」

困った顔をする和史を見て、美世は苦笑する。

思えば和史も、弱気になってきている美世のために、わざわざ車で三時間もかけてアパートまですつ飛ばしてきたのだ。先ほど「由真のことを大切にしろよ」と、彼から言われたが、その彼自身もしっかり大切にしていかなければいけないと、改めて美世は思った。

それからは、時間を忘れて和史と雑談で盛り上がった。

最初は告白時の話で盛り上がったが、次第に内容はファーストキスの話、二人で遊びに出かけた時の話、関係が悪化した時の話と進んでいった。

気付いた時には、時計はすでに十一時五十分を過ぎようとしていた。

「あつ。もう、あんな時間じゃない」

「となると、美世もあと少しで二十歳になるんだな」

美世は時計を眺めながら、ゆっくりと首肯する。

あと十分——。朝、目覚めてからこれまでの時間まで様々な出来事があったが、今はだいぶ気分も落ち着いたようだった。

思えば今日の前夜祭や、ついさっきの和史との会話も、『あつという間』に時間が過ぎてしまったのだ。楽しい時間は『あつという間』に過ぎてしまうのは、子供時代からよく周りに言われてきたことである。

美世は残った缶コーヒーを、一気に飲み干す。

時間が『あつという間』に過ぎていく感覚は、相変わらず払拭されることはない。

おそらく、その感覚は死ぬまで無くなることはないだろう。しかし、いくら『あつという間』でも、今日の楽しい出来事は記憶にしっかり刻んでおこうと思った。

——自分にとって、これからの人生とは一体なんだろう？

ふと、そんな疑問が美世の頭によぎった。

しかし、すぐにその考えを振り払う。

何はともあれ、自分は明日でようやく二十歳になるのだ。

きつと、その結論を得るにはまだまだ時間がかかるかもしれない。由真に言われた通り、人生はまだまだこれからなのだ。恥ずかしくもあり眩しくもあつた十代が終わり、ようやく美世は二十代の仲間入りをするのだ。

そして、この二十日間の不思議な出来事は、絶対に忘れないとも心に決めた。

「和史。二十歳になつても私、頑張るから」

ゆつくりと進んでいく時計を見ながら、美世は力を込めて言った。「どういった未来がこの先に待っているのか、私にはぜんぜん想像がつかないわ。でも、由真の言う通り、未来の私が絶対に後悔しないような生き方をしてみせるから」

それを聞いた和史は微笑を浮かべて、美世の体を寄せる。

「なんか、急に格好良くなったな……。となると、美世もだいぶんき直ったようで」

「ええ。そう思うと、上京してからの二年だつて全く無駄じゃないと思うわ」

「二十歳になつてもよろしくな。美世」

「うん……」

和史のぬくもりをじっくり味わうように、美世はそつと目を閉じる。

後悔のない人生を一人の力で成し遂げるのは、意外と難しい。でも、横にいる彼氏や仲間たちの力があれば、可能性が無限に広がっていくような感じがした。

薄く目を開けてみると、時計はすでに十二時を過ぎていた。

「……ハッピーバースデー」

そう小さくつぶやいてから、美世は夢の続きを味わうように再び目を閉じた。



【07】19日目〜20日目（後書き）

この回で完結です。短い物語でしたが、読んでくれてありがとうございます。  
ございます。

この作品に関しての裏話にしましては、作者の『活動報告』の所に掲載しております。本来はここに書こうかなと思いましたが、あまりにも長すぎてしまい割愛させていただきました。よろしければ、ご覧ください。

作品の意見、感想等は歓迎です。謹んで返信させていただきます。  
す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1794n/>

---

20-twenty-

2010年10月8日14時28分発行